

宮崎県総合計画審議会第1回専門部会

(くらしづくり部会)

会議録

日時 令和7年12月16日(火)

9:50~12:00

場所 宮崎県防災庁舎42号室

○事務局

ただいまから、宮崎県総合計画審議会第1回くらしづくり部会を開催いたします。

まずは資料の御確認をお願いいたします。本日、お配りしております資料は、次第にある配布資料のとおり、次第、専門部会の委員名簿、それと配席図、「【くらしづくり】本日の論点」と記載された資料を配布しております。資料に不足がある方は挙手にてお知らせください。

御出席の委員の御紹介につきましては、時間の都合上、お手元の専門部会名簿及び配席図をもちまして、御紹介に代えさせていただきます。

それでは本日の議事に入らせていただきます。これからの進行は藤本部長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

○藤本部長

改めましておはようございます。部会長という大役を仰せつかりました。御指名ですので、務めさせていただきたいと思っております。

本日の会議ですけれども、後ほど御説明しますが、忌たんのない御意見をいただいて、今後のプラン作成等に生かしていきたいという趣旨でございます。どうかたくさん御意見いただきますようよろしくお願いいたします。

では、まず、本日の会議録の署名委員を指名させていただきます。黒木委員と中村専門委員にお願いしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします。

次に、副部会長についてですが、会の規定によって、部会長に欠席等があった場合には、その職務を代理として遂行するということになっております。私の方から指名することになっておりますので、副部会長につきましては、中川委員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは議題に入ります。本日の議題はお手元の次第にあると思っておりますが、2点、「中山間地域などにおけるくらしの維持」が1点目です。それと2点目につきましては、その下、「希望するライフスタイル（くらし）が実現できる魅力的な街・地域づくり」ということになっております。では、内容につきまして、まず事務局より資料の説明をお願いいたします。

○事務局

総合政策課の村角と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。私の方から資料を使って、御説明をさせていただきます。お手元の資料の「【くらしづくり】本日の論点」と書かれた横書きの資料を御覧ください。

事務局といたしまして、くらしづくりの論点を2つ挙げさせていただいております。1つ目の論点が「中山間地域などにおけるくらしの維持」、2つ目の論点が「希望するライフスタイルが実現できる魅力的な街・地域づくり」でございます。

まず、はじめに「中山間地域などにおけるくらしの維持」の論点についてですが、現状

として、人口減少により中山間地域を中心に、医療・福祉、交通・物流などの生活インフラが縮小し、サービスの空白域が拡大しております。また、移動が困難な地域が増えております。

さらに、自治体職員や税収の確保が厳しくなる中、施設・設備の老朽化や地域住民の皆様のニーズの多様化等により行政コストは増大傾向です。個々の市町村でのフルセットの行政機能の維持や公共サービスの運営が限界に近づきつつあります。当面の期間、人口減少が継続することを踏まえ、人口減少に適応し、今後も県民の皆様のご日常生活に必要なサービスを維持していくためには、地域においてどのような取組が必要かという点について、御議論いただきたく思います。

続いて、「希望するライフスタイルが実現できる魅力的な街・地域づくり」の論点についてです。人口規模の縮小に伴い、お祭りやイベントなどの実施が困難となる場合がございます。そうなりますと、地域ならではの特色・魅力が薄くなり、活気が失われることで、地域の人口減少がより一層加速化する恐れがあります。社会経済活動の拠点となる都市部・地域の人口規模を維持し、活力を確保していくためには、個人が希望するライフスタイル、くらしを実現できる環境を整え、住みたい、住み続けたいと感じていただくことが必要です。そこで、性別や年齢を問わず希望するライフスタイル、くらしを実現させるためには、どのような街・地域を目指すべきか、という点について御議論いただければと思います。

2つの論点のイメージを2ページに示しております。全国的に避けられない人口減少に直面する中、今後はますます、地域の担い手不足をAI・デジタルの活用や関係人口の創出等により補っていくことが必要となります。このような中、論点1では緑色で着色された中山間地域などの小規模集落や青色で示された地域をつなぐ交通網をどう維持していくかについて御議論いただくイメージでございます。次に論点2では、オレンジ色で示された基幹的集落など圏域の中心地となる街の活力をどのように確保するか、そして県民自らが希望するくらしをどう実現させるかについて御議論いただくイメージとなります。議論の参考といたしまして、次ページ以降に資料を添付しておりますので、御説明させていただきます。

3ページを御覧ください。こちらは、国土交通省の資料で、スーパーや映画館など、対個人向けの生活サービスの存在確率が一定以上になる人口規模を整理したものになります。例えば、10万人以上の人口規模でないと80%の確率で立地されない施設としては百貨店や映画館がございます。同じく、5万人以上の人口規模でないと立地されない施設は総合スーパーや結婚式場が挙げられています。今後の人口減少に伴い、各地域が立地確率の低い人口規模へと移行していくことが予想され、これまでどおりの生活サービスの維持が困難となることが懸念されます。

続いて4ページをお開きください。くらしに必要なサービス提供施設について、御参考までに県が所在地を把握可能であった施設を地図で示しております。中山間地域を中心に既にサービス提供施設までの距離が遠くなっている地域もございます。そして、人口減少が進む中では行政サービスの維持、充実も厳しくなっております。

5 ページをお開きください。地方公共団体職員数は近年、横ばいから微増傾向にございますが、全国的な人手不足により、各産業と同様に職員数の確保が課題となっております。

続いて6 ページを御覧ください。資料は県有施設についてですが、市町村においても同様に、公共施設の老朽化による財政負担の増大が懸念され、今後の行政ニーズに応じた公共施設の最適化を検討する必要があります。7 ページから9 ページまでは全国の参考事例を掲載しております。

まず、7 ページ目は、高知県の「賢く縮む」4つのSプロジェクトです。こちらは、複数の事業体を集め、束ねることでスケールメリットを追求し、真に必要なサービスを充実させながら賢く縮小していくことで、地域社会の持続可能性と県民のQOLを高めるという取組となっております。

続いて、8 ページ目には複数自治体による共同整備・共同運用といった自治体の枠を超えた広域連携の取組を掲載しております。例えば、資料の右側に記載のとおり、長崎市に所在していた長崎県立図書館と大村市立図書館は、統合により1つの図書館として整備されております。

9 ページ、10 ページには、地域の課題解決に向け、デジタルや新技術が活用されている現状を掲載しております。デジタルを活用することで、より利便性の高いサービスの提供が可能となるほか、人口の少ない地域での持続可能なくらしを実現する手段として、自動運転やドローンなどの技術の活用が期待されております。

続きまして11 ページを御覧ください。こちらは県が取り組んでおります「宮崎ひなた生活圏」づくりのイメージを示したものでございます。ひなた生活圏づくりとは、人口減少が進む中でも、日常生活に必要なサービスなどを維持し、将来にわたって住み慣れた地域に安心して住み続けるための仕組みづくりです。左の図にありますとおり、拠点となる基幹的集落に商店や診療所などを維持・確保し、外側にある周辺集落・小規模集落を交通やネットワークでつなぐことで、圏域全体として生活が成り立つ仕組みをつくるものでございます。日常生活に必要なサービスを地域一丸となって確保するためには、サービスの担い手となる方々が必要となりますが、その担い手の1つとして期待されているのが、地域運営組織です。

次の12 ページをお開きください。地域運営組織とは、地域のくらしを守るため、地域で暮らす人々が中心となって形成され、地域内の様々な関係主体が参加する協議組織が定めた地域経営の指針に基づき、地域課題の解決に向けた取組を持続的に実践する組織とされております。住民自ら地域の課題を話し合い、集落活動や生活支援サポートなど、地域のくらしを守る取組を行っております。地域の人口減少・市場規模の縮小により、民間事業者によるサービスの提供が減っていく一方で、空き家の管理や高齢者による生活サービス需要の拡大など、新たな住民サービスのニーズも生じております。このニーズとサービスの間が生じてしまう隙間を埋めて、地域でくらし続けられる機能を維持するためには、地域の資源を最大限活用する地域運営組織の役割が期待されているところです。

次の13 ページには、県内の地域運営組織の取組を御紹介しております。本日、御出席

いただいております石川委員が事務局長を務められております東米良創生会の取組も掲載させていただいております。以上が論点1「中山間地域などにおけるくらしの維持」についての資料となります。このまま説明を続けさせていただいて、後ほど、順に論点1から御議論いただければと考えております。

続きまして、「希望するライフスタイルが実現できる魅力的な街・地域づくり」について、16ページをお開きください。本県の人口移動の現状について、先ほどの審議会でもございましたが、直近の県全体の社会動態は、令和6年10月1日からの1年間で2,866人の転出超過となりました。16ページの資料は2024年のデータでございますが、市町村別に人口移動の状況を見てみると、宮崎市は県内市町村からの転入が多い一方で、県外に対しては転出が多くなっております。進学等により中山間地域等から都市へ移動し、大学進学や就職等を契機に、都市から県外へと転出している様子が見えられます。圏域の中心となる都市・地域が人口流出を食い止めるダム機能を果たすことが求められております。そして、宮崎に住み続けたいと感じていただくためには、地域でのくらしやすさも求められております。

17ページを御覧ください。本県は全国と比較して通勤時間が短く、物価水準が低いなど、都市圏とは異なる魅力もございます。自由に使える時間やお金が増えることで、自らが希望するライフスタイルを実現しやすくなり、幸福度も高くなると考えられます。

次に魅力のある街・地域とは何か、18ページに例をお示ししております。災害のリスクが低い、自然があるなど記載がございますが、民間アンケート調査では、地域への移住に影響するポイントとして、「地域での日常的な買い物などで不便がない」という点が1位となっております。また、「街並みが自分の好みに合っている」という要素も3位にランクインしており、地方圏へ移住を検討されている方は情緒的な側面も重要視されているということがうかがえます。また、生涯を通じて学びの場がある、楽しめるイベントがあるというようなことも豊かなくらしには必要な要素と思われれます。

続いて19、20ページには、都市計画やまちづくりのイメージを掲載しております。都市計画とは無秩序な市街化を防止し、計画的な市街化を図るなど、長期的視点に立った都市の将来像を明確にしていく計画でございます。右図に示しております立地適正化計画は居住誘導区域と都市機能誘導区域を定め、コンパクトなまちづくりを推進するような計画となっております。

20ページを御覧ください。こちらは国土交通省が示した地方都市のまちづくり全体イメージとなります。にぎわい空間の整備など、まちなかの再生を図ることで、域内の消費を促進するイメージ図が描かれております。

次に21ページには、県内の魅力的なまちづくりに向けての取組を御紹介させていただいております。拠点となる施設や居心地が良く歩きたくなる「まちなかづくり」により、中心地に賑わいを創出している事例となります。

また、このような取組を実現する手立てとして、22ページにはPPP、官民連携の事例も御紹介させていただいております。

最後に23ページをお開きください。本県の強み、魅力であるスポーツや文化について

記載しております。2年後に開催される「日本のひなた宮崎 国スポ・障スポ大会」の会場となるスポーツ施設は、順次供用が開始されておりますが、さっそく国際的な大会の開催が決定するなど、地域の賑わい創出の一翼を担っております。また、ユネスコ無形文化遺産への提案案件に決定された神楽や、スポーツ施設を活用したイベント開催など、本県ならではの文化や魅力を生かした地域づくりも期待されるところです。

以上の内容を踏まえまして、論点1、2について順に御議論をお願いいたします。説明は以上でございます。

○事務局

若干補足をさせていただきます。資料の2ページをもう一度見ていただきまして、今から論点1、2を皆様に御議論いただきますけれども、イメージとしましては、論点1については、宮崎市、都城市、延岡市の3都市以外の、より条件が厳しい中山間地域などのくらしについて御議論をいただければと思います。論点2については、宮崎市、都城市、延岡市など、人口のダム機能として支えていかないといけない地域の今後のくらし・街の活力について、皆様に今から御議論をいただければと思っております。よろしく願いいたします。

○藤本部長

ありがとうございました。では早速ですが、論点1から始めたいと思います。この部会で何らかの結論といったものは求めておりませんので、今回は皆様からの御意見をいただき、事務局の方で整理していくという形になっております。くらしに関する御専門の皆さんですから、それぞれの立場で、あるいは説明を聞く中での御意見等をいただければと思います。

論点1につきましては、大体50分程度を予定しております。ちょっと長丁場になりますけれども、リラックスしていただいて、いろんな角度から御意見いただけると助かります。それでは、論点1「中山間地域などにおけるくらしの維持」というところで、御意見等いただければと思います。

○中川委員

宮崎日日新聞の中川です。今日はよろしく願いいたします。

議論の参考にさせていただきたいので、ちょっと質問ですけれども、1ページ目の「個々の市町村での行政機能の維持や公共サービスの運営が限界に近づいている」ということに関して、議会の質問みたいで堅苦しいかもしれませんが、すでに県として、もしくは県と市町村で、もしくは市町村同士で、何か協議が始まっているのかということとか、もし協議が始まっているのであれば内容や課題、それと今後の方針がもしあれば、基本情報として教えていただきたいなと思います。

多分じわじわとみんな分かっているけれども、言葉ではっきり書かれるとちょっとショックを受ける、という県民の一人です。これを行政のプロの方達がどういうふう整理し

て協議されているのかを知るとちょっと安心しますので、教えてください。

○事務局

県内市町村の方々とも今年夏から議論をさせていただいた中でお伺いしたお話としましては、近隣の市町村同士で、例えばごみ処理場など、そういったものは効率化するために、どこか1か所に構えて負担金を支払う、その中で今までどおり、皆さんがきちんとごみの処理ができるような形を整えるというような取組がなされております。

このような形で、それぞれの圏域で、古くなっている施設だったり、いろんな建て替えのタイミングもあるかとは思いますが、どういうふうにするかという生活の維持して、必要なサービスを残していくかということに関しては、市町村同士でもお話しがされておりますし、県の方でもそちらをサポートするような場を設けたり、研修会を実施したり、そういったことは現在取り組んでいる状況でございます。

○中川委員

体系的に県内の市町村で、この分野はちょっと継続が難しいとか、そのためにこういったことができるなど、俯瞰して見ているような会議とか組織とか、検討は始まっているのでしょうか。

○総合政策部次長

総合政策部次長の佐野でございます。

中川委員の方から御質問いただいたほどまで差し迫った状況にはない、というのが端的なお答えとなります。ただし、デジタル化の推進など、市町村単位でやるよりは近隣の2～3自治体で同じような仕様でやったほうが良いというような形で、例えば事前の相談をするという動きは、県内各市町村同士でも見られるというところですが、体系的にもう危ないから何とかしましょうというところまでには至っていない。ただ、間違いなくこのまま人口が減ってきて職員も減ってくる、体力もなくなるということになってくると、ここに書いてあるようなところが目の前に、もう来ているというふうに思っているところです。

○佐藤委員

今の関連で、西臼杵三町では実際にこういったことをやっています。西臼杵三町、高千穂、日之影、五ヶ瀬は、合併はしません。ただし、一部事務組合で、ごみ、し尿、葬祭は一緒にやる、そして消防も広域消防という形で始めました。なぜかというと、高千穂と日之影は10分くらいで行けます。高千穂と五ヶ瀬でも今現在で15分か20分くらいあれば行ける。そういう中において、消防とかも必要ならつくろうと。それと、病院を西臼杵医療センターという事務組合に移行しました。これは国保病院を高千穂も日之影も五ヶ瀬も持っており、別々に運営をしていましたが、やはり医師の確保や看護師・技術職の確保、経営の効率化などを考慮して、医療関係を1つのセンターにして機能を分けようというも

のです。これは、人材確保の面もありますし、やはり経営の効率化とかそういったことも含めて取り組んでいかないと、将来なかなか中山間地には来ていただけないということもあるかなということで取り組んでいる。個々の自治体の行政区・町としての方向性はそれぞれ独立していますので、それは一緒という形ではないですが、できることは一緒にやれば良いのかなということで西臼杵はやっています。

それから2ページのこのイメージ図、まさにこういったイメージを目標というか、現実がこうなっています。日之影町の例を言えば、277.7平方キロという広大な面積の中に、111集落があります。1人世帯のところから、中心部の何百世帯かあるところまで。集落と人を守るためには、やはり役場中心に病院があり、福祉施設、特別養護老人ホーム、社会福祉協議会、ガソリンスタンドなど、まさにこういった形があって、そこから各集落にもコミュニティバスを走らせて、病院に来ていただくという形を取っておりますし、役場から延岡市あるいは高千穂については広域的バス路線ということで宮交さんに運行していただいています。各集落には、町独自のコミュニティバスあるいはデマンド型交通で動かしており、まさにこの絵のような形になっていますけど、この中で一番私が考えているのは、やはり高齢者の方々の移動手段です。あとは介護の支援と見守りですけど、高齢者の一人暮らしで心配なところは、ITを使ってセンサーで見守りしています。画像ではプライバシーがありますが、センサーを設置して異常があれば中心部のセンターに来て連絡を取って行くとか、もう今20~30世帯くらいになります。まず、この図のような形でやっていくことで、その地域で暮らせるというふうに思っていますので、それを進めていきたいなと思っております。だいぶ前になりますけども国の方向性だったか、中心部に皆移って来ていただいて住宅を建ててそこで暮らす、集約化するというような方向性もありましたけど、たぶんそれでは生まれ育った地域で暮らしていきたいという人たちのニーズにはならない。できる限りこういった仕組みでやっていますので、どうやってさらに維持していくのかということが課題ですけど、それにはやはりそれを担う人材を考えていく必要があるのかなと思っております。

○藤本部長

ありがとうございます

○石川専門委員

東米良創生会の事務局長をしています石川です。私は宮崎市から1時間半かけて東米良に行って、村づくりに参加させていただいております。

先ほど佐藤委員からもありましたように、宮崎市から東米良に行くので、とても人数も少ないといえますか、私が初めて行ったときから200人の集落です。隣の西米良村長からも、人口減少の最先端を行っている地域だと言われまして、私たちが何をやるかというのが最新の事例になるだろうと注目して見えていますというようなお声も掛けていただきました。まさしく人が少ない中どうやってそこに住み続けるかということと、言われたようにやっぱり生まれたところに住み続けたいという思いが強いついていうのも見させていただい

て、どうやって守り続けていけるかということで、皆さんが使っていた言葉ですけれども「1000年続く村」というスローガンを掲げて今活動しています。

やはり200人ということで、資金ありませんし、施設も当然足りませんので、ここにありました地域の運営組織という役割をおそらく担うものに創生会がなりました。地域の方たちに、こういうものが必要だよねというようなことをみんなで話し合いをしてできた組織です。何をするといいかと言いますと、人も物も情報も共有する場所、ハブになるような場所というような位置付けです。委員の人たちは地域の人たちもいますが、外部の出身者の方、関わりを持っている方も含めて15名程度の理事で成り立つNPO法人です。NPO法人を選択した理由も、企業がするとちょっと偏りが見えますので、非営利なんですよ、みんなに平等なんですよという立ち位置で組織を作ったほうがいいだろうということでできました。地域の人たちが代表で入ってはいますが、200人しかいなくても大きく分けると3つに地域が分かれているため、3つで活動は別々にしてもらっています。東米良地区というのが、西都市の中では行政地区の中の1つなので、いろんな交渉がしやすいということで、東米良地区として活動をしています。

ひなた生活圏づくりではお世話になりまして、今、私たちの地区内では、白ナンバーの車を2台用意させていただきまして、ドアツードアです。免許を返納した方たちが電話1本していただければ、お迎えに行って目的地まで運ぶ。地区内にはなっていますが、西都市と交渉をさせていただきまして、一般的な高齢者の方たちが使われている移動支援をこの集落内の人たちは受けられないので、何も支援がない中、移動に困っているということで、そのオンデマンドカーに関わる燃料費を西都市が支援しています。1回乗るに当たって50円100円200円と、移動距離によって一部負担金をいただいています。車の運営費用の方は西都市さんが頑張って負担していただいているのですけれども、運転手が絶対問題になります。運転手はどうするかと言ったときに、事前の登録制で70歳までと決めて、地域の方たちのボランティアで成り立っています。そのボランティアもやっぱり70歳までとなると、退職した後の人で人数が限られてくるので、必要なときに運ぶ人というのが課題になってきました。公に助けてもらう人が欲しいということで、地域内の企業の方たちをお願いをして、勤務中に地域支援を企業がやる。こういうニーズがありますと伝えると運転手になってくれる。その間は、何々の企業が地域活動を支援しているよというような立て付けでやっています。宮崎市の人がこの東米良に来てその仕組みを見まして、自分のところはタクシーを呼んでもいつまでたっても来ないし、バス停に行こうものならとっても遠いところにあるし、タクシーで運良く行ったとしても帰りに呼ぼうと思ってもなかなか捕まらない、なんてここは便利なんだと。その便利さを地域の人たちが実感しているかどうか分からないですが、今すごく生活の中になじんでいまして、とてもうまく、誰も困らないように回っています。また車がみんなですべて所有しているものになっているので、そこが一番いいところで、これを個人の車でやるとなるとちょっと難しい状況になるのかなと思っています。

人が少なくなって、私たちが一番先に課題になったのは、こんなに小さな集落でも組織が乱立していることです。市街地と同じ組織を負担する必要があり、同じ人がものすごい

数の役を持っているという状況がありましたので、1つの組織に全部の機能を付加させるという方向性を取らせていただきました。東米良地域づくり協議会という西都市が設定している組織にいろんな組織を当てはめて、活動を一遍に協議するという形にさせていただいて、会議数も少なくなりました。会長さんになる人は20何個役があるそうですが、今の縦割りで組織があるというのがとっても大変なので、そこを組織的には重ねたところです。次に問題になるのは、組織の数ごとに申請書、報告書、いろんなものがあることです。それを賄う人がいないです。そこはNPO法人の東米良創生会が担うという役割になっています。その地域負担をなくしたことで、逆にいろんな支援を受けることもできるようになり、活用することができるようになったというのが現状です。

○藤本部長

ありがとうございます。

○渡邊委員

なかなか私どもの交通網は皆さんのところへ提供ができなくて、申し訳なく思います。その中でも、県からいろんな御支援をいただきながら、明日の無料バスなどいろいろやらせていただいております。さっき佐藤委員が言われたような地域間を結ぶところすら難しくなってきたりまして、運転手が足りない状況ですと、宮崎交通では50人ぐらい足りない状況でございます。採用もやり続けていますが追いつかないというのが現状です。と言いながら、いろいろ知恵を出していかなければならないですが、実はタクシーも一緒に、タクシーも30人くらい不足しています。

ここに自動運転の話がありますが、私も西都市で乗ってきましたけれど、なかなかまだ進んでないような状況です。中国に今年の夏に行きまして、大体20キロ四方の駅で200台のタクシーが自動運転で走っていました。全く誰も乗っていません。私も最初誰も乗らないのかと非常にびっくりした。70キロ出ており、隣から自転車の割り込みもありましたが、しっかり避けながら、価格的にも通常のタクシーと同じぐらいの状況でした。こういう形で自動運転って書いてありますけど、日本は本当に実現化するまでにまだまだ時間がかかるなと私自身思っています。人がいない中、いきなり無人化って必要だなと、自分が乗って思いました。できないことはない、これはできると。もうレベルⅢとかレベルⅣと言っている状況ではなくて、全く誰も乗らずにバスもタクシーも運行していく方向に早く持っていけないと、もう遅れてしまうのかなと思います。我々民間もそうですが、県も含めて、国に対して、そういう動きを早くやっていただく、具現化していただく要請をしていかないと。いつも電気自動車を見ているんですが、あと何年かかるのかと。いつもこんな状況なので、本当に実現していくところに持っていかなきゃいけないと非常に感じて、私もいろんなところに行って今この話をしています。

○藤本部長

ありがとうございます。

○石川専門委員

このレベルの高いサービスを受けるほどの通信網がないです。いまだに携帯も何もなくて、ここでパンクをしたらという場所がたくさんある。実際に滑落事故で場所を特定するのに、消防隊員がその滑落した場所まで行かないと場所が想定されないため、ヘリコプターも呼べない。

私たちが行って、住民だけでできることと、どうしても住民の力ではできないことという色分けをさせてもらったときに、通信網の整備は、住民がいくら望んでも、どれだけ背伸びをしても獲得することはできないものです。道路の整備もそうです。先ほどの図にもありましたけれども、私たちが事務所を置いている地区は西都市の都市計画の中で生活拠点地域として指定されています。ただ、県道 39 号線が崩落で普通車しか通れないため、物資の輸送とかそういった車が一切通れない状況です。その不便がずっと続いているので、国とかの方向性というのは分かりますが、計画だけ止まりと言うか、実際の生活する上でのところまで生かされていない。東米良でとても人がいないということを前提にいろいろやっけていこうと努めていますので、私が宮崎市に住んで東米良に行って仕事をするというのも集落の労働力の確保です。そういうような働き方もあるので、二拠点生活、三拠点生活みたいなことも今後なってくると思います。そういった上でも、道路だったり、通信網だったり、そういったものがどこでも整備されてないと、今のレベルのくらしに追いついていかない、魅力にもならないというところをととても感じているところです。現状、村づくりというか頑張ってきましたが、頭打ち状態です。結局は、自分たちで解決できないところ、道路の整備や通信の整備はずっと課題として残っているというのが現状です。

○藤本部長

ありがとうございます。

○中村専門委員

綾町の方では今、高齢者の外出機会を援助していくということで、オンデマンド交通を実施しております。町が実施しているものではなく、町から社会福祉協議会の方に依頼があって、その協議会の方で運営をしています。町内に 125 ヶ所でしたか、停留所が設けられて、今非常に高齢者の方から活用されているということをお聞きしています。綾町在住の 70 歳以上の方で運転免許を返納した方、また障がいのある方、そして特別な理由がある方、そういった方達を対象に実施をされております。運行時間は午前 8 時 45 分から午後 5 時 45 分までで、電話等での受付を行って利用していただくということで、高齢者の方から非常に便利だ、ありがたいというようなことをお聞きしております。

○藤本部長

ありがとうございます。

○柳本委員

柳本です。よろしくお願いします。

先ほど石川委員のお話を聞いてすごい活動だなと思い、お聞きしたいです。この地域運営組織というものがあるということですが、こういう方々がわざわざ宮崎市から行かれているということで、各地域にこういう方々がいらっしゃるのか、かなり格差があるのか、格差が生まれてきているのかという素朴な疑問がありまして。もし格差があるのであれば、そういう方々の活動におそらく今後頼らざるを得ないと思うため、活動をどういうふうに支援・拡充するのか。民間やNPO、そういうところに頼らざると得ないところで、気持ちが折れちゃったら終わり、みたいなものだとなかなか継続しないと思いました。現状を分かる限りでお聞かせいただけますか。

○中山間・地域政策課

県が定義している地域運営組織は、中山間地域に今 11 組織あります。1 市町村に複数設立されているところもありますので、全体的に設立されているかということ、そうではないところです。このため、県としては、地域運営組織を一生懸命作っていきたくて思っており、そのための支援として、まず、地域の皆様に、地域の課題は何だろうかということを知ってもらう必要があると思いますので、ワークショップの開催をさせていただいているところです。東米良創生会さんも御活用いただいた課題解決のための支援ということも準備をさせていただいているところであります。また、人材育成が特に大切だと思っておりますので、こちらについても研修会などを通して努めているところでございます。

○石川専門委員

私は宮崎市の方で総合型地域スポーツクラブの活動をしています。スポーツを通じた町づくり、地域おこしというのをずっと長年させていただいているところです。そういった活動が御縁で、東米良に行くことになりました。私たちに声をかけたのは、社会福祉法人善仁会さんです。社会福祉法人善仁会の地域貢献事業としてそこで活動してほしいのでぜひ行ってもらえないか、というようなつながりで、村おこしに入らせていただいたというところがあります。これは企業の地域貢献でスタートしたところです。

そのあと私たちが中に入って何を見たかと言いますと、東米良地域づくり協議会というものがある、私たちが活動していた宮崎市の佐土原にも地域づくり協議会っていうのがあって、たくさん地域づくり協議会があります。私が知っている限りだと、何をやっていかわからない地域づくり協議会がたくさんあると思っております。私はこれまでの反省点もありまして、地域づくりで何をすべきなのかということをもう 1 回、今ある組織に考えてもらい直したいという思いもありました。東米良に入ったときにそういう思いもありましたので、本来地域づくりとは何をやるものなのかという視点でさせてもらいました。私たちはいつまでも企業支援で行くという形は妥当ではないと思っておりますので、東米良地域づくり協議会という行政が作っているこの組織が、事務局費、人件費というもの

が元々はあるところでは。その人たちに、今私たちがやってきたような仕事は、本来していただきたいと思っています。そこをうまくつなぐためのものを今一生懸命作っているというような段階です。

私も市民活動をいっぱい他にもさせていただいていますので、皆さんの話を聞くと、中間支援組織とか運営組織というものは、おそらくなんですけど各課で認識されていると思います。総合型地域スポーツクラブも、33 でしたかね、市町村にあります。その人たちも地域づくりとして地域に深く関わっていらっしゃる組織です。その人たちも地域の人たちを対象にするものなので、同じようなことをすれば、すぐ運営組織になると思います。地域にはそういう活動をしている方たちが眠っていて、子ども食堂をやってらっしゃる方も、子ども食堂だけでは事足らず、高齢者支援まで手を伸ばしちやっみたいなどころもたくさんあります。そういった人たちも地域を相手にしている人たちです。この人たちが地域運営組織になるということは、あり得ると思っています。ただし、皆さんの一番の課題は事務局を運営する費用がないということなんです。ここは何も利益を生まないところなので、どうやって運営すれば良いのかと。この事務局さえちゃんと支援するものがあれば、何とか運営組織はうまく回っていくのではないかと考えています。今の私の経験上です。そのあとはいろんな支援があるので、ハブになる、いろんな方たちの立場を通訳して、行政と地域をつなぐ役をする、そういった人たちのところに、もうちょっと手厚くしていただくと、地域の方たちの声も拾いやすくなるし、いろんなものをつなげやすい組織になるのではないかと今は感じています。

○柳本委員

よく分かりました。

○藤本部長

元々地域の中に、石川委員が担っているようなことを、例えば発想であるとか、実務ができる方がいないのか、いかがでしたか。

○石川専門委員

いないのではなく、なぜか住民まで縦割りになっています。住民は総合的にやりましようと言いたくなります。地域まで、うちの組織ではできないからと言われます。中にいる中間支援になりそうなところも、それはうちの分野じゃない、みたいなことを言う人たちがいるので、地域を総合的に見る人達が住民の中に現れた方が、フットワーク軽くニーズにきちんと応える動きができるものになるのではないかと考えています。

行政にはできないことがいっぱいあることも分かっています。地域の人たちが賢く、自分たちの地域を守る、継続するという意識を持たない限り難しいので、今は東米良の人たちは課題があるけれど、どの方向で解決するかという協議です。いろんな解決策があるので、多方面で見られるというのが地域です。視点を変えるだけで、能力のある人はいると思います。そこを何か継承したら、小さな集落でもとても面白い活動ができるのではない

かと思っています。

○藤本部長

ありがとうございます。

○島中専門委員

東米良創生会もそうですけども、すごく地域に寄与して活動していらっしゃるなど、ありがたい取組だなと感じていますが、一方で、なかなか継続できないかなど。予算的なこともありますし、先ほど心が折れたらという話もありましたが、こういった方々が活動している間に、一方で、何とか勇気ある撤退ではないですけども、縮小していく覚悟、前向きな勇気が必要ではないかなど。要は、税も人口も少なくなってくるので、その中で100点満点はかなり難しいと思います。そういった中で1つ1つに対して、どこまで痛みを皆さんで共有できるかという話し合いも必要ではないかと思います。人口100%が満足するということはありませんので。ただし、ここまで我慢してくれたらこういったことをしてあげられるとか、予算の中で最大限できることを実行していく、また、予算がなくても、先ほど企業の貢献という話もありましたけれども、企業と連携することで何か解決できることがあるかもしれない。そこは縮小するパイの中でどうやって生き残っていくかということを探っていくことが必要になってくるのではないかと思います。県民市民の方、地域の方々も、100%は無理ですよと、痛みを必ず伴いますと、その上で話し合いをしましょうという、もしかしたらこれは議員さんの役割なのかもしれないですけども。例えば議員さんでも、こういう地域の現状をどれだけの議員さんが知っているのか、どれだけ行政の方に橋渡しをしてくれるのかということ、正直今疑問なところもあるので。そういったところでいくと、やっぱり自分たちがちゃんと危機感を持つ、自分たちというのは住んでいるの方々ですね。行政が何とかしろ、ではなく、自分たちが住んでいる町が小さくなっていくという中で、何をどう取捨選択していくのかということをお互いに協議して、受け入れていく覚悟が必要かなと感じます。

○藤本部長

ありがとうございます。

○黒木委員

中間支援という言葉が出ましたが、私もすごく中間支援は大事だなと思っています。直接支援ももちろん必要ですが、そこをコーディネートしていく事務局や、声なき声を拾っていただけるのは当事者ではなく中間支援団体であったりするので、その維持というのは、すごく大事ななと思っています。

能登の方でまちづくりの復興支援に入れていただいて、被災した人たちが公民館に集まって、これから自分たちの町をどうしていくっていう話し合いを行って来ました。珠洲は本当に中山間地域で、人口減少が急速に進んでいるところに災害が来たという中で、これ

から自分たちの町をどうするか。先ほど島中委員もおっしゃったとおり、住民の皆さんがお客様になっていました。住民自治ということを考えると、自分たちが担い手になっていく、誰かが来てやってくれるわけではないので。やっぱりもう人口減少の中で全て維持していくことは無理なんですよね。守るべき機能が何なのか、見捨てるじゃないですけど、ある程度整理すべきものは整理するというのを、近くにあることよりも確実に使えることの方が大事なので。それが何なのかっていう整理は、特に災害現場ではそういったことをやります。今聞きながら同じ手法だなと思いつつ聞いていたところです。

宮崎市は去年、地域自治区を廃止したところですが、地域自治の運営組織というのは残っている中で、それ見ながら思ったのが、地方に行けば行くほど、小規模多機能の小さな団体というのは、災害時にすごく機能します。大きな団体よりも小規模多機能でいろんなことを地域でやっている、そういう活動が本当に強いところほど復興も早いというのが、すごく見えています。そういう意味では、段取りを追ってというか、整理をしながらやっていくということが必要なのかなと、お話を聞きながら思いました。

○藤本部長

ありがとうございます。支援に行かれたところはもう変わってきているのでしょうか。自覚じゃないですけど、そういった担い手に私たちがなるぞというような。

○黒木委員

これはまだまだではあります。ただ1つ変わってきているところがあって、キーマンは子どもたちでした。輪島に行ったときに、輪島の年配の方はここに住むのはもう無理だと言いました。もう街は復興しないとしましたが、高校生たちはこのまま輪島で育ちたい。この意見の違いが若者と高齢者であって、そこを埋める作業に今現地のNPOが取り組んでいます。今少し変わってきているところの報告は受けています。また来年に行くので、状況を見ていきたいと思います。

○藤本部長

ありがとうございました。

その子どもたちは高校生、中高生ですか。

○黒木委員

中高生です。

○石川専門委員

東米良で言うと、皆さんで具体的な数字の把握は必要だと思っています。おかげさまで私たちが令和の最初から入って7年間たっていますが、200人を切らない人口推移です。最初は64%の高齢化率でしたが、今は55%です。なぜなら赤ちゃんを産む人たちがいたからです。一気に下がります。そこで、高齢化率を25%にしたいとしています。若者

を入れて増やさないと 25%にはなりません。そこで、若者が住みやすい集落はどうすればいいかと、いろいろ考えているところです。

1つは、学校は絶対なくさないということで、山村留学もしているところですが、その充実、そして最近地元生も増えてきています。1000年続くということは、子どもをちゃんと大人にしないとダメです。子どものため、未来のために今何ができるかという視点で皆さんが考え出したというのはとても大きな機会でした。先ほど言われたように、年配の方はもう後がないからと平気で言われて話にならないというところは私も感じたところです。子どもが真ん中と言いますか、みんなで平等にこの先の未来を考えるというのは大事だと思っています。

500人というのも、当然無理なことは分かっている。なぜ500人にしたかと言うと、500人居たら地域が回ると言っているからです。神事も含めて、いろんなことを含めて500人いたら回る。あと500人以上は回らない、というセリフがついています。なぜかと言うと当事者意識が欠けるからです。全員参加にならないから500人以上は回らないと言った地域です。でも500人には回らないです。残り300人をどうするかと言うと、私達みたいな人たちを活用します。そこをまた皆さんと分析して、何がどこにどれだけの人数がどの季節にいついるのか、というところの数字も出させてもらっています。今、ゆず採りや神楽のサポーターさん、そういった300人を埋めるためのサポーター制度というのを作らせてもらいました。人がいない200人のままでやりますが、必要人数というのはみんなちゃんと把握しようということで、みんなで声をかけるという活動をしています。子どもが真ん中というのは未来を考えるということなので、未来のために何が今できるのかという視点は大事だなと思ったところです。

話がちょっと戻りますが、移動支援について、総合型地域スポーツクラブの話をしていただきたいです。子どもたちへのスポーツの提供をということで動いています。昨今話題になっている部活動の地域展開という話になっています。部活動の地域展開という前に、私たちは部活動にない種目や学校にない部活動を応援してきたという背景がずっとありまして、今後も変わらずそれをしていこうと思っていますが、高齢者だけでなく、したい活動に行く子どもたちの放課後の時間帯にも支援する人がいません。そこに行きたいけれども、子どもが学校から行けないです。保護者の方たちは働いているので。そこがいろんな分野で出てきている、子どもが機会を失っている、保護者の負担もかかっているというのが現状です。その移動支援が中山間地域だけでなく、市街地の子達も、解決できない課題として残っています。呼びたいけれども呼べないというのがあるので、ここに記録で残ってほしいと思い、お話しさせていただきました。

○藤本部長

ありがとうございます。

私から質問ですが、中村委員、いわゆる自治公民館活動は、非常にコミュニティの中で重要な役割を果たしてきていると思うのですが、将来の展望も含め、いかがですか。

○中村専門委員

はい。自治公民館の状況をお話しさせていただきたいと思いますが、私たちも館長として、方針として持っていることは、とにかく住民同士のつながりを強くし、強い地域づくりをしたい、あるいは、この町に、この地域にずっと住みたいと、そういう地域づくり、そしてまた災害に対する共助、この部分も強い地域づくりをしたいということで、それぞれの公民館長さんも頑張っておられると思いますが、しかし現実是非常に厳しいものがあります。

まず1つは、高齢化のために役員のなり手がいないという問題、1人の方が厚生部長、副館長、いろんな役を含めてやらざるを得ないという状況があるということ。

それから、2つ目は、地域住民同士のつながりが非常に希薄になっているために、行事への参加者が少ないという現実。そしてまた、もう今は公民館そのものには加入したくない、公民館費は払うけれども行事には参加しないと。見ていて本当に気になることは、人とつながることに対して煩わしさを感じている人、そういう気持ちを持っている人が非常に多くなってきたというような感じを持っております。綾町に22の公民館がありますが、そこでも状況を聞きますと全く同じこと言われます。公民館が先々はなくなるかも、という方もいらっしゃいます。

非常にやる気のある団体が入っていただくとまた盛り上がるのかもしれませんが、しかし現実はいろんな障害があってそこまでできていないという状況です。私たちも、地域に入っていてよかった、楽しい、地域でつながりを持つことによって幸福感を感じる、そんな地域づくりをしていかなければいけないと思っておりますが、しかし、現実には厳しいと。この22の公民館も、合併をしなきゃいけないか。また、もう1つの方法としては、地域コミュニティ協議会、行政が入っても、22を4つぐらいに分けて運営をしていくか。そういう状況です。これは多分綾町だけではなく、他市町村でも、もうこれは全国的かもしれません。公民館活動はそういうような状況になっているところです。

○藤本部長

ありがとうございます。

そろそろ論点1については時間です。

○中川委員

最初質問だけだったので。私はメディアの立場で出ておりますので、情報というか、みんなで意識をどう作っていくというような、ばくっとした話になりますが、2点あります。

1点目が、最初に質問させてもらった行政機能が継続困難になっていくということに関して。県民は、この数年の人口減少のスピードを見て、もう認識をしていると思います。そしてそれに関して、漠然とした不安を感じていると、そういう段階にあると思いますので、その不安をまず軽減することが大事なのかなと。この地域にはちょっと住んでいけないのではとなったら、出ていってしまうかもしれません。現状ある不安をみんなで受けと

めて軽減するような、分かち合うというか、一緒に共有するようなことが必要だということで、今お話しただけでも、分かり合えるだけでもちょっと安心するところがあると思います。こういう取組が始まっているとか、そういう場を県民が多く持てるように、いろんなワークショップやシンポジウムとか、もっと小さなざっくばらんなことで良いと思いますが、何か必要じゃないかなということ。また、その中でもその住民の力を引き出していかないといけないという、そのフェーズにきているというのは間違いないです。いろんな情報が混沌としている中では、県がいきなりその中に入って協議をしていくのは難しいとは思っているので、やはり行政や課題を分かっている方たち、実践されている方たちが、少し先回りをして、整理をして、情報をきちっと訴えていくというのが大事なのかなと思います。そのことで住民が準備する時間を持てる。準備をしながら、自分たちがやらないといけないこと、当事者として自分ごととしてやらないといけないことという理解が進んでいくと思いますので、一緒に語り合う場というのが必要かなと思いました。

もう1つ、論点が中山間地と街の方と2つに分かれていますけれども、もちろん切り分けて整理して考えることも必要ですが、一方で、中山間地の現状を街の人たちにも伝え続けていくということが大事だと思います。やっぱり中山間地の役割ってすごく大きいです。宮崎はそのおかげで豊かになってきた県です。神楽など財産もたくさんあるというところで、中山間地の現状や課題・取組を、街の人に知らせて、そのことによって知恵や新しい技術をそちらにも向けていくというような流れを加速させていく。そこには若い人たちのビジネスチャンスも生まれる可能性もありますし、そこで中山間地と決められた方たちはそこで暮らしていくという新たな潮流も生まれるのかなと思います。そういった意味でも、知らせることというのが大事ですので、私ども新聞社などメディアの役割は大きいと思います。それを自分ごととして取り組んでいきたいと思っていますが、その中でも気をつけないといけないのは、東米良創生会は本当に素晴らしい活動されていて、宮日も何度も特集させてもらっていますが、逆にそういった動きが起きていない地域の現状、地域の人たちの声にも耳を傾けて、それを知らせていく、県全体で共有していくことが大事なのかなと思いました。

○藤本部長

まとめていただきましてありがとうございます。論点1につきましては以上で終了したいと思います。5分ほど休憩を取りたいと思います。

○藤本部長

おそろいのようなので、再開したいと思います。

それでは論点ですが、2の方に移ります。先ほどの論点1との関連というのはたくさん出るとしますので、もう2を中心にやりますけども関連事項は言っていて良いと思います。まだまだ盛り上がっていくと思いますので、遠慮なさらずに御意見をいただければと思います。大体30分から35分ぐらいを予定しております。

では早速ですが、論点2を始めます。どなたからでも結構です。

○渡邊委員

最初に一言だけ、私が43年ぶりに宮崎に戻って来た感想も含めてちょっとお話をします。私は高校卒業して企業に就職して、別に宮崎が嫌いだからというわけではなく、大学が東京で、働く希望先が宮崎ではないところだったため、43年間宮崎を離れました。たまに帰ってくると、もう暇で、早く東京に帰りたいなど、そう思っていたのが40何年か続いていましたが、今ちょうど5年経ちまして、やはり住むとですね、物価も安いし、気候もいいし、人もいいし、年をとった部分もあると思いますが、我が故郷がやっぱりいいなど、戻って来て思っている次第でございます。

就職のときに、やはり魅力的な企業がない、それなりに賃金があって貢献できるような。この立場になったときにそういう企業に少しでも近づけられればと思っておりますが、まだまだそういうところは少ないのかなと思っております。若い人が出て行くのは悪い話ではないと思っております。今、東京・大阪・海外も含めて、いろいろ出ていく、逆に出て行くべきではないかと思っております。やはりその中で、宮崎に戻るチャンスというのが人生の中であると思っておりますので、そのときに少しでも、宮崎が魅力的なものになる努力は常に続けていかなきゃいけないと私は思っております。

そういう面では、少しずつですけども、胸を張って、私の生まれたのは宮崎県だよ、と言う若者はどんどん増えてきていると思っております。ここに書いてあるまちづくりや去年日向坂のライブを開催したような取組も含めて。スポーツでも、一昨日は私が会長をしているマラソン大会で5～6千人の人が県外から来られまして、全部で1万人ちょっと走っていただきましたけれども、いろんな形で宮崎も話題になってきて。私も東京・大阪で仕事をしたけれど、宮崎で貢献したいとか、宮崎で生活したいなっていう何かがある、いろいろあると思っております。常に、県、市、民間一緒になって、魅力的な街にしていく努力をしていけば、戻ってきてくれるのではないかという感じはします。

○藤本部長

ありがとうございます。

○島中専門委員

先ほど中村委員の公民館の話聞いて、私個人の小さな話をさせていただこうかなと思っております。以前引っ越しをした際、草刈りをしていると、ある方に、「あんたんこの庭の木の葉っぱが落ちてきて困るんだけど」、と挨拶をする前に文句を言われました。それはすみません、今後気をつけますと。作業していくと、今度は別の方が来られて、また同じこと言われました。最初に挨拶だろうと思いました。住んでいると、朝の5時半にチャイムが鳴って、回覧版を持ってこられました。朝が早いのは仕方がないですが、相手は、朝の5時に起きたから30分待つて持ってきた、と言われました。そういった中で、新しく入った地域の公民館のイベントとなると、もう顔も合わせたくないなというぐらい、1人の人間としてはそういう感情がやっぱりあるわけです。全員が全員そういうわけではないのですが、小さいところのコミュニケーション、コミュニティから始めていく必要がある

のかなと。例えば、回覧版を持っていくときに隣のおばあちゃんがいつもニコニコしながらありがとうね、と言われると、ちょっとうれしかったりもするわけです。人間関係が薄くなってきているから、ちょっとしたことでイラッときたり、ちょっとしたことで心がほっとしたり。大きな心を持って地域と関わっていかないといけないなと思った次第です。

○藤本部長

ありがとうございます。

○佐藤委員

今のお話に関連して、まさに地域の人と人とのつながりがコロナ以降希薄になっています。それから急に、さあ何かコミュニティを作つてというのは、非常に難しいと思います。

我々のような中山間地でもそういうことがあるわけですから、都市部ではなおさらかなと。それを解決するには、集落でのイベント・お祭りとか、それにどれだけ来ていただけるか、イベントやお祭りの重要性というのは非常に感じています。今、我々のところは神楽や祭りの季節ですが、お祭りは多くの方と触れ合いができます。つながりというのはやっぱり大事ななということで、子ども神楽を一生懸命やっている地域があります。そうすると、若いお母さんやお父さんたちが一生懸命で、その発表とかあるときにはおじいちゃん、おばあちゃんも来て、神楽に限らず、イベントもしていますが、スタートは幼稚園児のブラスバンドや小中学生の音楽にしながら、つながっていくという形にしています。1つ1つのつながりを再度認識することによって、町外からおいでになる、移住して来られた方々もやはり地域になじむ。子どもを含めた中での活動というのがやはり大事かなと。

それから、町が魅力的になるということについて、1つの例として、うちの町はわら細工があります。そこには移住してきた大変若い人がいます。今は1人前になって、その方に引きずられるようにして、関東の大学を出て日之影で暮らすという方が、何人かいます。価値観というか、良い大学を出て東京に行つてという考えが今の若い人は変わってくるのではないかと、大都市部だけではなく、宮崎県あるいは中山間地域にもチャンスはあるのかなと思っております。

○藤本部長

ありがとうございました。

○柳本委員

今回この論点2は、都市部ということと、女性・若者の定着という視点から思うことですが、本当にこの5～6年で大きく宮崎駅周辺も変わってきていると思います。昔から比べると本当に魅力ある、都市部で言うと延岡や都城もいろいろ施設ができていますし、皆さんが集える場所が増えているのかなと。

コロナを機に、都市部から宮崎に二拠点とか、移住もですが、そういう方々もすごく増

えているなということとは肌感覚では感じております。という中で、なぜ女性・若者が流出するのだろうということを考えたときに、もちろん1回は外に出たほうが良いという意見は私もあるのですが、それでも行きっぱなし、戻ってこないという問題もあります。特に女性は、どうしてもまだ宮崎の事業者さんが正社員目線であり、正社員は正社員で良いのですが、例えば介護や子育て、又は都市部で高いスキルやいろんなキャリアを持たれている方が宮崎に旦那さんの転勤で来られたりしたときに、そのスキルを地場で生かせる何かというところが、どうしても時間拘束型の働き方の提供が多いです。ジョブ型やスキル提供型を宮崎に落とししてもらおうという仕組みがまだまだ足りないのかなというのは、ひしひしと実感しています。私がデジタルスキルの塾や子育て中の方へのお仕事の提供というのも少しやっちはいるのですが、大変ニーズが多いです。皆さん駆け込んでこられますし、職業訓練校もコロナのときにリモートワークや在宅でできるような仕事を求める方々がすごく殺到したというのは聞いています。せっかくデジタルスキルやいろんなものを学んだとしても、そのあと結局その仕事に就いている方が本当に少ないという状況ではないかと思えます。ネットではもちろんたくさんありますが、どうしても都市、東京や大阪、そういうところの大手派遣や紹介会社が提供するものが多く、宮崎だと週に1回来てくださいというのもある、宮崎の人がそこにはあふれてしまって、良い仕事が見つからない。結局他の仕事に流れてしまっているというような、もったいなさがすごくあるなというところで、自分に何ができるのか、いつも考えてはいます。

ここにある希望するライフスタイル、働くことだけではないですが、例えばさっき言われたような、夕方の塾の送り迎え、部活動の送り迎え、子どもが病気になったときは、ほぼまだ女性、奥さんがやるよね、という文化は、どうしてもあると思います。そのときに、旦那さんは仕事から帰ってこない、自分も働いていて行けないとなったときの、サポートできる仕組みがあると、年齢性別問わず、みんなが働きやすく、くらしが豊かになるのかなと思っております。

○藤本部長

ありがとうございます。

○石川専門委員

最近ちょっと良くなっていると思いますが、働き方というのはすごく制限をされていて、子どもがいても仕事はしたい、20代という時にスキルをつけていきたい、経験値を上げていきたい、子育てもしたいのですが、自分の経験値を上げていきたいという中ではものすごくハードルが高かった気がしています。もうちょっとハードルを低くして、子育ても楽しみながらスキルアップもできるというのが、宮崎の女性として、生き方として、何かもうちょっとPRできるものがあれば。女性側もやれないと勝手に思い込んでいる人たちが結構いらっしゃるのを私は耳にします。子どもがいるからできない、子育て中だからできない、「できない」をいっぱい並べている女性がいるのも確かです。その中でもできることはあるはずだと思っている、同じ女性である私もいます。そこら辺は、女性同士

でも意見交換というか、情報共有は必要かなと思っているところです。

私にとって東米良は究極の過疎地で、もうやるしかなかったので、いろんな実験、チャレンジをさせていただきましたが、若手が住みやすい集落にしなければいけないときに、子育てしやすくしないといけないです。ただ、保育園がないです。どうするかと言うと、1時間かけて市街地に行って通わせて、またお父さん、お母さんは戻ってきて働くという御家庭があります。1日4時間送迎で使っている現状がありました。そこが2軒か3軒あり、なぜ誰かの車に1台で行かないかという、何かしら御迷惑をかけるといけないから。3家庭バラバラにその4時間を消費していくのを見させてもらって、これはもしかして、外部の仕組みに皆さん乗りませんかと言ったら利用するのではと思いました。送迎支援を実施し、それに参加をするという形をとらせてもらっています。介護の送迎の前と後ろが空いているので、その時の運転手さんに地域のボランティアとして、ちょっと早めに来てもらい、1時間かけて乗せていく。8名くらい乗っています。1つの席に地域の60~70歳ぐらいの女性が支援として付いていく。子どものお世話として、みんなでシフトを組んでやってらっしゃる。それが地域の方の居場所、役割分担になっていて、地域の子どもをみんなで育てているような雰囲気です。その送迎の運営だけでみんなの居場所ができたという好事例だと思っています。その保護者の人たちも、もちろん地域で支えてくれている人たちに感謝をするので、とても良い感じに回っていると思っています。全員プレーで暮らしやすくするという好事例と思い、紹介させていただきました。

○藤本部長

ありがとうございます。

皆さん宮崎の良さは何、と聞かれたときに、なんてお答えになりますか。私はスポーツ関係でいろんな各県に行き、今度大きな大会も来ますが、宮崎って何が良いのと聞かれたときに、暖かいよと言います。これは気候もそうですけど人も温かいよ。ただ、先ほどから話が出ているとおり、企業があるのかと言われたら、これがありますとはなかなか、それはないと。車がないと生活ができない部分があるので、大都市圏に行ったらもう電車で、車よりずっと早くて便利、なんて答えようかなと思いつつ今まで来ていますが、いかがですか。

○黒木委員

私は移住者なので、良いところというか、もちろん都市部とのメリット・デメリットもある中で、生活しやすいか、通信や人混み、買い物のしやすさ、子育てのしやすさ、そういったところの暮らしやすさというのは、都市部よりもすごく高いなと思います。遊び、娯楽は駄目です、少ないので。くらしという目で見ると、とっても宮崎は暮らしやすいところなのかなと。混まないところが、それが一番良いと思います。

災害について、先ほど住みやすい街のところで、災害のリスクが少ないというところがありました。残念ながら宮崎は大雪、豪雪以外は経験する県でございまして、リスクはとも高いです。ただ、1つ宮崎の良さで都市部と違うのが、都市部から見ると人のつなが

りがまだまだある、すごくそれを感じています。都市部は人口が多いので何かにぎやかに見えて人がいるようには見えませんが、本当に隣に住んでいる人が誰か分からない状態。人のつながりというところに関しては、宮崎は非常にあるのかなと思います。

幸福度ランキングでは、宮崎がいつも10位以内には入っています。沖縄と宮崎が毎回10位以内に入っています。なぜ沖縄の皆さんはそんなに自分たち住んでいるところが幸せと思うのかを調べたことがあります。背景には、戦争のときの地域住民との関わり合いがあるということをお話される方がいらっしゃいました。そこから見ると宮崎もまだまだ地縁の濃さというのはあるのかなというところは思っています。

子ども食堂関係の仕事もやっていますが、今これだけ地域に関わる人がいないという中で、子ども食堂は宮崎県内で120ヶ所あります。その半分が、コロナ禍で立ち上がりました。なぜなのか、私もいろいろ調査すると、何か自分が地域の役に立つことをやりたいと思っている人がまだまだ地域にいるということ。目的をはっきりしてあげれば、ちょっと自分たちもできるのではないかと、そこに我々みたいな中間支援と一緒に伴走支援させていただくことで、地域の中で活躍してくださる。実は子ども食堂は災害時の拠点にもなっていく、ずっとつながっていくということもあると思うので、地域のコミュニティの新たな作り方というか、そういったところはすごく必要かなと思います。

東日本大震災のときに言われたのが、災害時にも共に生きる設計がある町を作ろうと、すごく言われました。災害後、共に生きることができるといえる町というのは、復興がとにかく早い。そのためには、普段から人が設計をして慣れておく必要があります。誰も孤立させない、取り残さない地域を作るといえるところ、私はコミュニティというところをもう少し見直していく必要があるのかなと思います。全国から見ると宮崎はとても良い県だという良さも、伝えておきたいと思います。

○藤本部長

ありがとうございます。

ここに書いてあります特色とか魅力が何なのかというのはやっぱり認識しておきたいと思います。2年後にスポーツ関係で大きな大会が来ますが、狙っているもう1つは、リピーターです。宮崎で活動してものすごくよかった、もう1回行きたい。その先に宮崎に1回住んでみようかと、そういった狙いも1つはあると思っています。全国から何十万という方がいらっしゃるの、1つの大きなPRポイント・アピールポイントにはなるかなと思います。全市町村で開催されますので、何らかの形で魅力を伝えていきたいという気持ちはもう十分持っています。

○石川専門委員

宮崎市は宮崎市だけの情報、ではなく、枠を超えたところの情報共有が必要かなと思っています。今年のゆずはすごい量があり、取るのが大変です。木自体も全部取り終えないとだめになるので、絶対に取らないといけません。その時に、近場の人たちだけにサポーターをお願いしますと言っても難しいので、ちょっと枠を超えたところまで、何かお願い

したいというのもあります。14、15日で銀鏡神楽のサポーターをやりましたが、43人のサポーターさんが来ました。黒木委員が言ったように私もサポーターを募集するのにどうすればいいのかと思いましたが、1時間単位で申し込みができるようにしています。神楽を見るついでではないですが、この1時間内に駐車場のところに立ってください、のように具体的にすると、受付で好きなところを選んでやってくださるので、こちらが欲しいことをより明確に伝えることで、支援しやすくなる。丸々サポートが欲しいです、みたいな具体的ではないところでいくとなかなか手が出せませんが、具体的に言うと、サポーターというのが集めやすいなと思っているところです。

市町村を超えたつながり、人の共有、先ほど施設の共有もありましたが、国スポのおかげで施設が立派なのがいっぱいできる一方で、宮崎市でスポーツ活動をしていますと、施設の老朽化があります。学校の施設も老朽化しています。ここにライトが欲しいですと言っても、そこまで回す費用がございませぬという回答をずっともらい続けます。人が少なくなっているのに施設ありすぎだよ、というのが正直なところで。維持するよりも、もうちょっと利用の仕方、宮崎市はプールが立派なのができるが指導者もおそらく足りてないと思うので、そういったきれいな施設に学校の1時間をかけて行けば、学校のプールはいらなくなるのではと思う。近場の小中学校が上手く施設を利用するというところで、施設を守っていくという方法もあるのではないかと最近思っています。

○藤本部長

ありがとうございます。

○中川委員

まず、部会長からのお尋ねがあった宮崎の魅力ですが、率直に答えるならば、やっぱり自然と青い空かなと思っています。青い空に関してはちょっと私事ですが、夫が県外の出身ですが、何で宮崎に引っ越してきたのかという話を聞くと、青い空があるところに暮らしたくて宮崎に来たと。そこからちょっと派生すると、特に若い人たちにとって魅力のある宮崎であるために、それを感じてもらうためにも、1つの工夫として、今すごく多様性の時代になったということと、幸せは1つじゃない、暮らし方も仕事も1つじゃないというのが時代でありトレンドであるということを考えたときに、宮崎で暮らすといろいろな楽しめやすさよということを伝えていくのが良いのかなと。台風の話もありましたけど、季節に応じた楽しみ方ができる、それが街と山でできる、街と海でできる、街と文化、街とスポーツと、いろんな「掛ける」をすることで、いろんな楽しみができる宮崎ということは打ち出せていくと良いなと思いました。

もう1つが島中委員がおっしゃったことが私すごく響きまして、希望するライフスタイルが実現できる宮崎のまちづくり、これは若者と女性の意見交換会の中でもやっぱり出てきています。誰もが生き生きと活躍できる社会とか、それぞれの個性を大事にされる社会が求められています。子育てをされていて、知り合いの人たちと話をしているときに、誰誰ちゃん帰ってくるんだね、次は結婚だねって言われました。結婚したらお母さん安心する

ねって言われました。娘はショックを受けまして、耐性が少ないと言われればそれまでですが、やはり今の子たちは私たちの世代よりももっと男女平等の教育を受けて育ち、性別に関わらず力を発揮してくださいと言われ育ち、大学で学んだことを活かしたいと就職するところで、もう次は結婚だねと働く前に言われて。そこで終わったらいけないと思い、その人に私はっきりと、いや私はそう思わないんだよね、私は娘の結婚について特に何も考えてないし、別にそれが幸せだっていうふうにも思わないよ、という話をはっきり言いました。最近「じゃああんたが作ってみろよ」というドラマが話題になっていますけれども、あれもいろんな偏見や思い込みというものを語り合いながら意見を交わしながら、段々人が変わっていくっていうドラマですごく人気を集めました。今までの宮崎だと、何か言われて、「やっぱ宮崎ってこれやわ」とか、「終わっている」だとか、多分子どもたちはそう思っているのですが、違和感を感じた人も言っているのではないかと。その人も意見を言っていて、こちらも意見を言って。宮崎は少し意見を表明するのを遠慮しがちなところがありますが、ちゃんと言ってみると相手も変わってきて、住みやすい小さなコミュニティがまずできていく、それが何か大きなコミュニティにつながっていく。小さいコミュニティのことは、毎日のことだから、大きい話よりもすごく気になります。隣半径何メートルかの範囲内を強くしていくことというのが、大事なのかなと思いました。若者のことを考える上では、大人たちの意識もやっぱり変えていかないと、若者に迎合するという意味ではなくて、そしてまた無理やり宮崎に住ませるという意味でもなくて、自分の気持ちが心地よく暮らしていくための、佇まいというか、そういうのを大人たちはしっかり持っていく必要があるのかなと思いました。

○藤本部長

まとめていただき、ありがとうございました。

それでは時間になりましたので、本日の審議は以上で終了させていただきます。たくさんの方の貴重な御意見をいただきました。ありがとうございました。部会の御意見として、長期ビジョンの改定とその素案づくりに生かしていただきたいと思います。

お忙しい中まだまだ続いていきますけれども、よろしく願いいたします。では進行をお返しいたします。ありがとうございました。

○事務局

皆様、熱心な御意見どうもありがとうございました。

今後に関する事務的な連絡事項をお伝えいたします。次回の専門部会につきましては来年3月下旬頃を予定しております。部長からも説明がありましたとおり、本日の議論を踏まえて、長期ビジョン改定の素案を御審議いただく予定にしております。詳細が固まり次第、速やかに事務局から皆様に御連絡させていただきますので、御出席のほどよろしく願いいたします。

なお、総合計画に関する、お手元に配布しております2つの冊子につきましては、次回、審議会・部会でも使用いたしますので、お持ち帰りにならないようお願いいたします。

す。本日、駐車場を御利用で、駐車場の押印が必要な方は受付にお声掛けをお願いいたします。

以上をもちまして、閉会とさせていただきます。

本日はありがとうございました。